

文語・口語の韻律(後編)

谷 真樹

前編では下の句の展開に注目してみた。後編ではまず、少し違う視点からの論を展開してみようと思う。

【韻律とテニスのブレースタイルの力学】

テニスには「センターセオリー」という基本的な戦術がある。テニスのネットは、中央部がベルトで絞られコートに固定されている。これにより約十五センチ(ボール二個分)低くなっている。このわずかな差がラリーの行方を大きく左右することになるのだ。ボール二個分ネットが低いセンターを通して打つコースは、ネットに掛かるミスとサイドラインを割るミスの確率が低くなる。緻密なコントロールと持続力が求められるゲームのなかで重要になってゆくのである。

この「センターセオリー」を、大森静佳の短歌に重ねて読んでゆこうと思う。

さびしさの単位はいまもヘクタール葱あお
あおと風に吹かれて 大森静佳『ヘクタール』
たぶん何度生きてもわたし カルデラ湖し
んと冷えゆく朝をつかんで
雲よいま淡くわたしを横切るなつま先立ち

をしてやりすごす

これらの歌はいずれも構成上の中央、すなわち「センター」に重きを置いている。五七五七七の中央にあたる第三句は、全体の均衡を決定する要であり、韻律の中核をなす位置である。そこに「ヘクタール」「カルデラ湖」といったカタカナ語が据えられるとき、読み手の感覚はそこに収束する。音声的にも視覚的にも重い語がセンターに落とし込まれることにより、歌の構造全体が引き締まり、詩的エネルギーの集中が生まれるのだ。

テニスにおけるセンターショットが、リスクを減らしつつも強打が可能となる効果を發揮するように、大森の三句切れや体言止めには、リズムの中央でいったん呼吸を止め、後半下の句に余韻と上の句への跳ね返りをつくる。その呼吸の「間」が、韻律の美として機能していると思われる。

次に、別のセオリーを見てみよう。

ゆきなさい 駅にピアノの置かれあるはず
しいこの世をいま振り切って
ふりおろす あなたのためと言いながら自
分のためにこの声の鎌

これらは初句切れで始まる歌である。命令形やインパクトのある動詞による強い立ち上がりが印象的だ。この場合、読み手の呼吸よりも一瞬早く詩情が飛び出して来る。この型をテニスにたとえるなら、サーブを打ちそのまますネット方向へ前進、バウンドを待たずに空中で仕留める「サーブ&ボレー」のように思える。

初句で勢いよく言葉を打ち出し、次の句以降で一気に詩的展開を仕上げる構成。瞬間的かつ意志の強さを感じさせるリズムである。ここでは「韻律＝動作」としての身体性が前面に現れている。言葉が先行をし意味が追いつくよりも早く、リズムが読み手の身体を駆け抜けてゆく。まさに声の運動連鎖としての短歌である。

祈るとき眉間に露出するものをわたしと呼びぬ夜の踊り場

声帯が帯であるならきらきらと真昼あなた
の帯をほどきぬ

春ごとにさくらを見つめ眼球はやがてつがい
の獣めきゆく

ねむれ噴水 しずかな水にしゃがむとき乳
房は遠いつららの痛み

大森の短歌には「眉間」「声帯」「眼球」「乳房」といった身体のパーツに関する単語が頻出している。韻律としての身体性との関係を考えるとな筆者の論もあながち飛躍しすぎではないように思える。

こうして見ると、大森の歌は、句切れの位置、すなわちリ

ズムの重心の置き方を通して、短歌における「ブレーススタイル」を確立していることがわかる。

三句切れはセンターショットのように確実で美しく、初句切れは高速サーブのように鋭く言葉を打ち出している。どちらも詩の韻律的運動を支えるリズム設計であり、その選択は偶然ではないように思われる。

詩はスポーツとは異なり、勝敗を競うものではない。だが、どの位置から打ち出し、どこに呼吸を置くのか？ それらは言葉の配置にすべてが懸かっている。「韻律と戦術」この視点から見たとき、大森の歌は、静寂なるコート上、精緻なフォームで放たれた一打として読む者の心に響くのである。

次に文語ではどうか？ 岡本かの子の短歌を引いてみた。大森の歌における「センターセオリー」と「サーブ&ボレー」を念頭に見てゆこう。

裏街の角さびしくて赤ぼすと孤児のごと停

ちてあるかも 岡本かの子 『わが最終歌集』

ねごろもに打ち見揚げばさくら花つめたく
額ぬかに散り沁みにけり

中央第三句に切れを置く構成は、韻律上の「センター」に重心を据える型であり、詩の安定と緊張が共存する。たとえば「赤ぼすと」の歌では、〈裏街の角さびしくて〉までが情景の助走であり〈赤ぼすと〉という一点で詩の軸が立ち上がる。センターに据えられた名詞の硬質な響きが、歌全体を支える柱となる。そこから後半の〈孤児のごと停ちてあるかも〉へ余韻が広がる構造は、まさにネット中央を通過したあ

との伸びのあるストロークにも似ている。

「さくら花」の歌も同様に「ねごろもに打ち見仰げば」という上句の柔らかい動作ののちに「さくら花」と詩の球が打ち込まれる。そこから「つめたく額に散り沁みにけり」と感覚の波が広がってゆく。

甲斐なしや強げにものを言ふ眼より涙落つ
るも女なればか 岡本の子「ころきねたみ」

あきらめて蚕を飼ふほどの優しさを誰が恋
故に覚えたまへる 『愛のなやみ』

次に初句に切れ目のある二首を見てみよう。「甲斐なしや」「あきらめて」どちらも初句に強い感情のエネルギーが集中しており、歌の冒頭で一気に詩情を打ち出す構成である。前述の大森の歌のようにテニスでいえば、サーブ&ボレー型のリズムにあたる。

「甲斐なしや」の初句の呼びかけるような言葉がそのまま詩的主導権を握り、以後の展開を支配している。「強げにも」を「眼より涙落つるも女なればか」と流れるように続くリズムは、サーブ後の前進運動のように滑らかで、リズムの加速を伴うと思われる。「あきらめて」の歌も同様に、初句が全体のテンポを決めているようだ。「蚕を飼ふほどの優しさ」と展開し、最後に「誰が恋故に覚えたまへる」と突きつけるように問う構造には、ためらうようなリズムがない。初句の強打で始まり、結句でしなやかに決める。まさに岡本かの子らしい、情念を詩的運動に変換するような韻律である。

【文語と口語の頭韻法】

頭韻法とは文学的技法の一つであり、連続する単語や密接に関連した音節が、同じ音の子音または文字で始まるものを指す。短歌において快い音調をもたらし、音楽的雰囲気醸し出すのに貢献している。

文語短歌は小島ゆかりを例にあげて見てみよう。小島の短歌には、細やかに配慮された音の配置によって情感を繊細に立ち上げる力がある。

ひとむらのはなゆれやみて昼顔は一つ一人

の遺影のごとし 小島ゆかり『はるかなる虹』

花ふぶく広場のフリーマーケット、ピラ追

ひかけて走る人あり

古猫のひとり遊びのあさあけのこんなやさ

しい日がありがたう

ふるさとの家の合鍵もうどこも開かぬ古き

鍵ひとつ持つ

一首目、「ひ」「は」といった柔らかな唇音が連鎖し、昼顔の白い静けさと孤影の気配を呼び起こしている。音の微かな反復が、花の揺れのやみとともに沈黙へと収束してゆくようだ。「やみ」がひらがなで開かれており「闇」とも通じる。それが昼顔の「昼」との対比になり、やがて「遺影」につながってゆく流れになっている。

二首目では「は」「ふ」の風のような音によって、花びらとピラと人の動きが一体となり、それにより生の瞬間の輝き

が立ち上がるようである。

三首目でも「ひ」音の反復があたたかな呼気を生み、猫の孤独と朝のやさしさを包みこむ。語尾の「う」に向けて響きがやわらぎ、祈りにも似た感謝の念が滲み出ているようだ。

四首目では「か」「き」音が繰り返され硬質で冷たい閉鎖感をつくりながら「ひ」「ふ」音がその硬さをやわらかく解きほぐしている。開かぬ鍵をなお「ひとつ持つ」という音の呼吸のなかに、過去と現在のあわいに息づく思いが響いてくる。小島の歌における頭韻は、意味を飾る技巧ではなく、感情の呼吸そのものとして働いていると思われる。

次に口語短歌は嶋稟太郎の四首。こちらも頭韻を巧みに採っている。

定刻はとつくにすぎて吊り革が同じリズム

でまだ揺れている 嶋稟太郎『羽と風鈴』

露の葉がテニスコートの北側のフェンスの

下に押し寄せている

手の平を開いておけば手のひらが合わさる

ようにあたたかくなる

くるぶしの近くに白い花が咲く靴紐を結び

直す時間

一首目、た行の頭韻から生まれるリズム感が、電車内で一列に並ぶ吊り革の揺れと同調し、時間の停滞を音として再現している。「同じリズムでまだ」という時の残滓のようなものを形づくっている。

二首目は「露」と「フェンス」が音の響きで呼応し、ささ

やかな統一感をつくっている。「露」を「どくだみ」や「石路」に置き換えると、音の流れが乱れ散漫な印象になるだろう。このような小さな音韻的工夫が、歌の奥行きを支えていると思われる。

三首目の「て」と「ひら」の繰り返しだが、作者から読み手へ、対象を限定しないひろがりを生んでいる。同時に「あ」の響きが、体温のようなぬくもりの実感を残している。

最後の歌は「く」の連続が「靴紐」へ自然に導き、音が意味を導く構造を見せている。こうして見ると、嶋の語彙の選択は意味からではなく、どうやら音から決めてゆくように思える。この「音から意味を立ち上げる」方法こそ嶋の韻律テクニクの核心部分のひとつであるように思われる。

嶋の歌を連作単位で読んでゆくと、一首ごとに完結した景が並ぶようでありながら、音の系統が一貫している。テーマやモチーフではなく、音韻の系統的統一によって全体の調和が保たれている点が特徴である。そのため、個々の歌が独立しているながら、全体を通して読むと透明な空気を感ずる。

ここまで論じてきて実感したのは、五七五七七の定型が韻律を効果的にするテクニクを使う上で重要な基盤となるということである。そして口語にも独特の味わいはあるが、文語には定型に沿った調べを自然に整える要素が備わっているように感じられる。

韻律の分析をし、大きく三つを論じてみた。だからといって、これらをすぐに実作へと取り入れるというのは簡単ではないと思う。が、心に留めておこうと思う。